重点講座2 文学的文章の形式別対策

学習目標
●問題解答時に必要な基本知識を、整理して身につけよう。
●文学的文章ならではの、問題を解くときに注意するべきポイントを理解しよう。

標準問題

1 選択肢 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ひとり暮らしを始める「私」は、母と一緒に引越し先の近くの店にでかけ、鍋などの生活に必要なものを買った。

母とは店の前で別れた。アパートにいって荷ほどきをすると母は言い張ったが、ひとりで大丈夫だと私はくりかえした。

「そうね。これからひとりでやっていかなきゃならないんだもんね」

母は自分に言い聞かせるようにつぶやいて、幾度か小刻みにうなずくと、顔のあたりに片手をあげて、くるりと背を向けた。①ふりかえらず、よそ見をすることなく、陽のあたる商店街を歩いていく。母に渡された重たい紙袋を提げ、遠ざかる母のうしろ姿を私はずいぶん長いあいだ眺めていた。母のうしろ姿はあいかわらず陽にさらされてちかちかと光っている。カートを引いて歩く老婆、小走りに駅へ向かうスーツ姿の男、幼い子どもの手を引く若い母親、いつもと変わらぬ町を歩く人々の合間を、母はまっすぐ歩いていく。雲のない空の下で商店街はふわふわと明るい。この光景を、ひょっとしたら私は一生忘れないかもしれない、ふいにそんなことを思った。そんなことを思ったら急に泣き出しそうになった。ひとりになって泣くなんて子どもみたい。②私は母が向かう先とは反対に走り出す。かんかんと音をさせてアパートの階段を駆け上がり、紙袋の中身を取り出した。いつのまに母が頼んだのか、それとも店員が気をきかせたのか、大中小、三つの鍋はプレゼント用に包装されていた。でこぼこの包装紙のてっぺんに、ごていねいにリボンまでついている。みず色のリボン。ひとりきりになったちいさな部屋のなか、思わず私は笑ってしまう。〈角田光代「鍋セット」より〉

(1) ——線①「ふりかえらず、よそ見をすることなく、陽のあたる商店街を歩いていく。」とありますが、このときの「母」の気持ちとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 娘を信じたい気持ちはあるのだが、やはり心配で仕方ない気持ち。
イ 娘のことよりも、娘のいなくなった自分の生活を心配する気持ち。
ウ 娘のひとり暮らしは心配だが、娘を信じて任せようという気持ち。
エ 娘に鍋のセットをプレゼントできたことを、喜ばしく思う気持ち。

□

ポイント
ふりかえりもよそ見もせず、まっすぐ歩いていく母のきぜんとした姿に込められている強い意思を読み取る。
※選択肢には、一見正解に見える紛らわしいものもある。正答だと思ってもすぐに解答せず、全ての選択肢を確認してから、最終的な答えを選ぶことで、ミスを防ぐ。

(2) ——線②「私は母が向かう先とは反対に走り出す。」とありますが、このときの「私」の気持ちとして適切なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア ひとりで帰っていく母の様子が心配だ。
イ これからしっかりしなくてはいけない。
ウ 落ち着いた商店街の様子が少し心強い。
エ やっとひとりになれてすっきりした。
オ 初めてのひとり暮らしはやはり心細い。

□ □

ポイント
「急に泣き出しそうになった」「子どもみたい」「かんかんと音をさせてアパートの階段を駆け上がり」などに注目して、「私」のいろいろな心情を考える。
※複雑な心情を問う場合などには、複数の解答を求められる場合や、「全て選ぶ」ように、正解の数がわからない場合もある。全ての選択肢の内容を、一つずつ文章と照らし合わせて、適切かどうかを考える。

2　選択肢　**次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。**

中学一年生の畑中良平は、臆病を克服するために、大倉先生と、仲間の博信、正太が見守る中、学校橋から川への飛びこみに挑戦することになった。

「頭からか足からか、どっちから飛びこむんや良ちゃん」

博信がまた叫んだ。

頭と足……どっちにしたらいいのか。頭からがいいのは最初からわかっていたが。良平は一瞬迷った。逡巡した。

「足から飛びこめ、畑中」

大倉の大声が耳に突き刺さった。

「はいっ」

と素直に口から言葉が滑り出た。

空を見上げた。雲ひとつない澄んだ空だった。悲しいくらい大きな空だった。自分がひどく小さく見えた。

欄干に手をかけて橋の下を覗きこむと、渦を巻いている水が見えた。濃くて深い水の色だった。また自分が小さく見えた。

そろそろと欄干に足をかけた。ついさっき、筏の試運転をしたときのことを思い出した。あのときと同じ這うような格好だが、あのときは楽しかった。だが今は――。

おずおずと欄干の上に立った。

「下を見るな、畑中。上を見ろ」

大倉の声だ。

その声の通り、良平は上を見た。空があった。やはり悲しいくらい大きな空だった。

何かがふわりと吹っきれた。悲しさめがけて良平は飛んだ。空と水の間に身を投げだした。経験したことのない奇妙な浮遊感と同時に、いうにいわれぬ快感が走った。

「やった」

胸の奥で叫ぶと同時に両足にどんと衝撃を受けて、良平の体は柔らかいものにつつまれた。心地いい感触だった。見上げると水の上に空があった。良平は空をめざして突き進んだ。

（池永陽「少年時代」より）

(1)　文章中の良平の心情の変化に合うように、次のア～エを並べ替え、記号で答えなさい。

ア　恐怖　　イ　喜び
ウ　決心　　エ　迷い

□ → □ → □ → □

ポイント

「一瞬迷った」「逡巡した」「自分が（ひどく）小さく見えた」「そろそろと」「おずおずと」「何かがふわりと吹っきれた」「いうにいわれぬ快感」「やった」「心地いい感触」など、良平の様子、態度、胸中の言葉などに注目して心情を捉え、場面に合う選択肢を当てはめていく。

※並べ替えの問題では、まず、確実なものを優先して並べる。曖昧なものは残った選択肢をヒントにして考え、後から適切な場所に挿入していくとよい。

(2)　この文章で描かれていることとして適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　良平は、大倉のアドバイスで、足から飛びこむことに決めた。
イ　良平は、橋の下で渦巻く水を見たとき、自分が小さく感じられた。
ウ　良平は、川の水面を見つめながら、悲しい思いで飛び込んだ。
エ　良平は、着水の瞬間両足に衝撃を感じ、その後水中に潜った。

□

ポイント

全ての選択肢の内容を確認してから、文章に戻って内容と照らし合わせる。

※選択問題では、常に適切なものを選ぶとは限らない。「適切でないもの」「当てはまらないもの」を選ぶときは、どれも正解に見えてしまうことが多いので、特に細かい部分に注意して文章と選択肢を照合する必要がある。

※文学的文章では、表面的な言動と本音がうらはら（逆）だったり、場面の状況が複雑に入り組んだりしている場合がある。心情を確認するときは内面まで丁寧に読み取り、入り組んだ場面は整理して捉える。

3 抜き出し　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

高校の天文部に入部した「ぼく」は、ロケット製作に取り組む班に入ることになった。

ロケット班の連中にはみな一癖も二癖もあって、ぼくは常々彼らに圧倒されていたのだが、ぼくの目から見ると、全員どこか即物的で*ハードウェア偏重主義のようなところがあった。特に教授や清水はそうで、ロケットをつくることに熱中しながら、じゃあどうしてそうするのかと聞かれれば、「つくりたいからつくるのだ」としか答えない。

しかし、ぼくにはどうしても、ロケットは目的ではなくて手段にしか思えなかった。ロケットは人間が遠い星へ到達するための乗物であり、それ自身が目的になるようなものではない。そう信じて、こう言った。

――①いつか、火星に行けるロケットをつくろうよ。

それはいい、と案外簡単に全員がうなずいた。

それが、ただでさえ大風呂敷を広げがちなロケット班の中でも、最大の大風呂敷になった。当時のぼくたちはまだそんなことをなんのてらいもなくできるくらいに、自分たちの可能性を信じていた。

まず夢を見ること。そしてその夢を実現するためにせいいっぱい努力すれば、かならず実現できる――そんな単純かつ進歩主義的な信念を抱いていた。もちろん自分たちが、まだ火星へ向かう気の遠くなるような道程の最初の半歩も踏み出してはいないことは十分承知していた。しかし、確固たる目標なしにはどんな計画も推進しえない。そんなことをぼくたちは本能的に理解していたのだと思う。

以降、ぼくは②ロケット班の火星情報担当者になった。時々、取り寄せた資料をひもといては、教授や剛太を前にしてその調査結果を発表した。「講義」というよりはむしろ「話題提供」という方がしっくりくるのだが、ふだんは教えられることばかりの教授や剛太に、何か知識を提供するのは快感だった。

（注）　ハードウェア偏重主義＝コンピュータの装置や機械部分を極端に重視する主義。

〈川端裕人「夏のロケット」より〉

(1)　――線①「いつか、火星に行けるロケットをつくろうよ。」とありますが、「ぼく」が、このように言ったのはなぜですか。次の文の［　　］に当てはまる言葉を、文章中から十字程度で抜き出しなさい。

▪ロケットをつくることは、［　　］だと思ったから。

ポイント

まず、設問で与えられた文から、「ぼく」が「ロケットをつくること」をどう思っていたのかを読み取る問題であることを押さえる。次に、――線①の直前に「そう信じて、こう言った。」とあるので、「そう信じて」が指している内容を、「ロケットをつくること」を中心に読み取る。

※空欄前後の言葉をヒントに、空欄にどのような言葉が入るのかを推測し、文章中の該当する言葉を探す。

※「十字程度（前後）」という指定字数のときは、八～十二字を目安に探す。解答欄が実際には何字分用意されているかも参考にできる。

(2)　――線②「ロケット班の火星情報担当者」とありますが、「ぼく」はこの担当者として何をしていると認識していますか。文章中から一語で抜き出しなさい。

［　　］

ポイント

「ロケット班の火星情報担当者」の「ぼく」が、具体的に何をしているのかを捉える。

※同じものを違う表現で示したり、長い説明を要約したりして、解答となる内容に合っている部分が文章中に複数あることがある。解答の候補が複数あるときは、問題に書かれている条件を改めて確認する。

※抜き出しの問題で「一語で」とあるときは、必ず一単語で抜き出す。内容的には合っていても、二語以上で答えると不正解になる。

4　抜き出し　**次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。**

小学校二年生のとき、「図書」という時間があった。図書館は好きだったけれど読書は嫌いだったので、私にとってそれはそれは退屈な時間だった。①なんでもいいから本を一冊ぬきだして、机の上にひろげて読むふりをして、実はなにもしないでじっとしている、というばかばかしいことをしていたのだ、毎時間。算数の方が、なにかやることがあるぶんよっぽどおもしろい、と思っていたのだから、とても自分のこととは思えない。

それで、「わらしべ長者」。

ピンク色の表紙の絵本だった。あるときなんとなく手にとって、文字の少なさにつられてつい読み始めたら、おもしろいのだ、これが。②それでどうなるのだろう、と好奇心にかられて頁（ページ）をめくる、という、読書のごく基本的喜びを、私はこのときはじめて知ったのだと思う。

それ以前にも、物語の喜びは知っていた。本を読むのは嫌いでも、読んでもらうのは好きだといういやな子供だったのだ。寝る前に、うとうとしながらカセットテープの落語をきいたり、父親の得意のつくり話――私が「くらいくらーい森のなか」でなにか危険なめにあって、絶体絶命のところで登場する父に助けられるという定型のもの――をきくのも好きだった。

しかし、それと読書の喜びとはまた別なのだ。紙に閉じこめられたもう一つの空間を、自分で頁をめくり、読みすすむことによってとき放つ、という能動的な作業のもつ愉楽。

私は「わらしべ長者」にすっかりはまってしまったのだった。

〈江國香織（えくにかおり）「泣かない子供」より〉

(1)　――線①「なんでもいいから……ばかばかしいことをしていた」とありますが、筆者はなぜこのようなことをしていたのですか。「……から。」に続くように、文章中から二十字で抜き出しなさい。

から。

ポイント

「図書」の時間について書かれているのは第一段落のみなので、筆者が、「図書」の時間に本を読むふりをしていた理由を、――線①の前後から探す。

※理由を答える設問では、原則として、文章中の「……から」「……ので」「……ため」という表現に注目する。ただし、文学的文章では、そのような表現で答えが示されていないことも多い。その場合は、登場人物や筆者の思い・心情から、理由となる部分を読み取る。

※抜き出す字数が「○字」とはっきり定められている設問では、設問の解答になりそうな箇所を探し、その部分が指定字数に合っているかどうかを確認する。

(2)　――線②「それでどうなるのだろう、……読書のごく基本的喜び」とありますが、これと同じ内容を表している一文を文章中から抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

～

ポイント

「読書のごく基本的喜び」について詳しく説明しているところを一文で探す。

※「一文で」抜き出す場合、特に指示がなければ文末の句点も一字と数え、答えに含める。

※「初めと終わりの○字」を答えるときは、間の部分を自分で省略することになる。「一文」「連続する二文」「□字（以内・前後・程度）」などの条件を確認して、適切な範囲を解答する。

5 記述 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

早馬は、高校の陸上部の三年生。故障でリハビリ中だが、このまま走ることをやめようと考え、チームメイトの助川に伝えた。しかし、同じ陸上部の弟、春馬は、兄の決断を受け入れられず、夕食の席で兄を問いつめた。

春馬に日農大を受ける理由を話したとき、①はっきり言うべきだった。はぐらかさず、ごまかさず、逃げずに。「やめる」と明言するべきだったのだ。また一人、こうして裏切ってしまった。

「どのみち、インターハイが終わればほとんどの三年は引退だ」

「駅伝、やらないの」

春馬が身を乗り出す。テーブルが揺れ、春馬が置いた箸が転がった。

「今からやって間に合うかよ」

春馬の口が動いて、喉の奥で息が詰まったような音がした。

「夏が終わったら、陸上部は引退する。もう、走らない」

その「もう走らない」の有効期限がいつまでなのか、早馬は理解している。助川も、うっすらと理解してくれているからこそ「お前はもう、陸上部にはいらない」と言ってくれたのだ。未練も後悔も名残惜しさも、何もかも捨て去れるように。

春馬だけが、どうやら納得してくれていないようだった。

②どん、と食卓を両手で叩いて、春馬は台所を出ていった。白米を半分以上残して。きっとあとで腹が減ってしまうに違いない。

残ったトマトクリーム煮込みを、早馬は大口を開けて頬張った。まだ熱かった。けれど構わず白米と一緒に喉に押し込んだ。舌がじんと痺れて、あとを追うようにピリリという痛みに襲われた。

微かに、涙が込み上げてきた。

〈額賀澪「タスキメシ」より〉

(1) ——線①「はっきり言うべきだった」とありますが、何を言うべきだったというのですか。十五字以内で書きなさい。

ポイント 続く文章中に「……べきだったのだ。」という類似の表現があることに注目する。指定字数に合わせて、なるべく具体的な内容を書く。

※記述問題では、答えとなる要素を見つけ、指定字数の八割以上の字数でまとめる。

※文末は、設問文と対応する形に整える。ここでは「何」と問われているので、文末は名詞で結ぶ（「……（という）こと。」という形でもよい）。

※文学的文章の前書きでは、登場人物の状況や、それまでのあらすじが簡潔にまとめられている。これらの内容は、問題を解くときの参考になる。

(2) ——線②「どん、と食卓を両手で叩いて、春馬は台所を出ていった。」とありますが、春馬はなぜこのような行動をとったのですか。十五字以上二十字以内で書きなさい。

15

ポイント ——線②は、強い怒りと、話を続けることを拒否する様子を表している。

※「○字以上▲字以内」という指定字数の場合、○字から▲字の範囲に収まるようにまとめる。

※文末は、設問文と対応する形に整える。

「なぜ……ですか。」（理由を問う設問）

↓「……から。」「……ため。」など

6　記述　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔「私」（香緒）は、佐々木さんたちのバンドに、ボーカルとして加わることになった。〕

本番三十分前。

トイレから出て、①流し場で大きくため息をついてると、佐々木さんが私に近づいてきた。

「緊張してるんでしょ」

佐々木さんらしい、ぶっきらぼうな口調だった。私は素直にうなずいた。そして、予想した。

「歌いまちがえたら、許さないわよ」

「私たちが楽しくやらなかったら、聴いてるひとが楽しめるわけないんだからね」

「このライブの成功は、香緒にかかってるんだからね、わかってる？」

佐々木さんのこんな激しい一撃が打ちこまれるのを、私は水道の蛇口に手をかけたまま、準備していた。

だけど、佐々木さんは、私に近よって肩に手をかけると、そのまま私を振りむかせた。そして、私をぎゅっと抱きしめた。

一瞬、なにが起こったのかわからなかった。

佐々木さんの首筋が私のほおにあたって、温かい。そして、

「大丈夫だよ。あんた、うまいもん」

佐々木さんの声が、耳の奥に流れこんでくる。そして、私から身体を離すと、肩をぽんぽんと二回たたいて、トイレを出ていった。

私はどぎまぎして、その場に立ちつくした。

はじめての佐々木さんの②褒め言葉だった。はじめての優しい言葉だった。緊張がほどけたというより、驚きで、緊張がふっとんだ。

〈草野たき「透きとおった糸をのばして」より〉

(1)　線①「流し場で大きくため息をついてる」とありますが、「私」はなぜため息をついているのですか。このときの「私」の状況も含めて、二十字以内で書きなさい。

ポイント　〝ため息をつく〟のは、心配ごとがあるとき、失望したとき、感動したときなど。ここでは、どのような心情でため息をついているのかを読み取る。答えになりそうな箇所は一箇所とは限らないことに注意する。

※記述問題に出てくる条件は指定字数だけではない。設問文を最後まで読んで、条件を全て押さえる。

「心情を含めて」「理由も含めて」

「『○○』という言葉を使って」「『××……』に続くように」

(2)　線②「驚きで、緊張がふっとんだ」とありますが、「私」はなぜ驚いているのですか。「普段」という言葉を使って、四十字以内で書きなさい。

ポイント　「普段」が指定語句となっているので、「普段」と「今」では、誰（何）がどのように違うのかを中心にまとめる。

※指定語句は、答えるための条件であると同時に、解答を導くヒントである。

※指定語句のある設問では、文章中の指定語句が出てくるところに注目する。文章中に指定語句がない場合は、その語句に関係する内容が書かれている箇所を押さえる。